



COMPASS



答えの無い問いを探していく。そんな時代だから目指す方位を指し示すものが要だ。そのようなものに私はなりたい。



教員の指導力向上を目的に、小学校算数科の指導において、教員による指導と塾講師による指導を調査、分析し、効果的な指導方法を見いだすため、令和5年度に「民間人材（塾講師）による専科指導研究事業」を行いました。本事業を通して見えてきた、教師、塾講師、それぞれの様子や良さをまとめ、先生方の授業に生かせそうなポイントを記載しました。

事業の概要

【実施校】

○県内3市にて、それぞれ塾講師配置校1校、小学校教師担当校1校で実施。

【実施学年及び期間】

○小学校第5学年算数科 ○令和5年6～7月、11～12月

【効果検証】

○千葉大学教育学部による調査、分析

○検証方法・標準学力検査（6・1月に実施。事業前後の変容を検証）

・千葉大学作成の単元テスト（毎単元導入時、終了時に実施）

・授業観察（記録） ・児童アンケート ・インタビュー 等

本事業から見えた、教師と塾講師、それぞれの授業の様子をまとめました！

【教師の授業の様子】

- ・「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」の流れに沿った授業実践
（特に「課題発見」「対話」を生み出す働きかけ）
- ・子供同士の関係づくりを意識した授業づくり
- ・児童の実態に根差した授業づくり
- ・言語活動への意識（話し合いや言語化できる場面設定）
- ・児童のフォロー（個別の声掛けや支援）
- ・意欲の重視（褒めて認める）

「実践モデルプログラム」が定着していることがわかります！

特に「対話的」な学びを促進する働きかけがポイントですね。

また、児童の実態を踏まえた適切な支援がされていることがわかりますね。



単元や本時の学習内容に応じて、授業の流れを変える工夫をしていますね。数値を変化させる方法は塾講師も取り入れていましたね。

また、1人1台端末を活用してチェックテストを行うなどの工夫を取り入れれば、より効果的に児童の習熟度を把握することができそうです。



【塾講師の授業の様子】

- ・授業の「まとめ」にあたる内容を授業の導入時に確認し、その後考え方や解法を考えていく
- ・教科書等に載っていない既習事項を確認してから本時の内容に入る
- ・提示する問題の数値を簡単なものから段階的に難しくする（スモールステップ） 等
- ・短時間で解法指導をし、練習問題を繰り返す
- ・チェックテスト(毎授業の導入時、まとめ時)を活用した児童の習熟度の把握

児童のアンケート調査や授業観察、インタビューの分析から読み取れる概要です

【単元テストの分析結果から】

学校教師・塾講師の授業は、ともに全ての層（上位・中位・下位）の児童の学力を伸ばした。

【標準学力テストの分析結果から】

塾講師による授業は、特に中位層、低位層の児童の学力を伸ばした。

→毎時間のチェックテストによる児童の習熟度の把握と個に応じた課題等の提供がポイント

〈課題〉準備や対応に時間が必要であり、小学校の担任は他教科の指導等もあるため、難しい。

〈対応策〉教科担任制等の専門性を生かした指導は効果があると考えられる。

【児童アンケート調査から】

質問項目の「算数の授業は楽しい」、「算数が好き」、「わかりやすい」、「説明がうまい」の肯定的回答の割合は、塾講師と教師とで同等であった。

これからの指導に生かせそうな効果的なポイント！

ポイント①

算数科で育成を目指す資質・能力を身に付けさせるため「実践モデルプログラム」のどの学習過程に重点を置くべきか考える。

また、「まとめあげる（結論を認識する）→見いだす・自分で取り組む（その結論を学習課題の解決を通して吟味する）→広げ・深める」のように、学習内容に応じて授業展開を工夫していく。

「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム



ポイント②

学習課題に取り組むにあたり、児童の実態に即し、提示する問題の数値を簡単なものから段階的に難しくするなど意図的に数字を変化させ、本時で学習する内容に迫るとともに、児童の発言（考え方）等を取り上げ、全体に問い返したり、グループで話し合いをさせたりし、育成すべき資質・能力の向上を図る。

学級やグループで話し合い活動を行っている児童生徒ほど、全国学力・学習状況調査の平均正答率が高い傾向があります。

児童生徒が多様な考えを理解できるように、互いに学び合う場面を設定してみましょう。



取り入れポイントの土台は、「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」です。このモデルプログラムを活用した実践例や学力向上に係るコンテンツについては、右の二次元コードから確認できます。活用してください。



ポイント③

授業の終わりに、その時間に学んだ一番重要な問題を1問抽出し、ICT機器を利用するなどして個別に取り組ませる（解説も加える）。

児童の習熟度を把握し、次時の導入時に、再度同じ問題を出題し、定着を図る。

ICTを活用することで、きめ細かく学習の状況を把握・分析でき、個々の児童生徒に合った学習の進め方ができますね。

このことは、個別最適な学びにおける「指導の個別化」にも繋がっていきますね。



ポイント④

「知識・技能の定着を図りたい単元」、「思考させ、課題解決に重点を置きたい単元」等、単元を通して児童にどのような力を付けさせたいか、また、どのような姿を目指しているかを明確にした上で、年間指導計画及び単元計画を立てる。

(例) 5年生

図形の角	領域B (図形)	●
偶数と奇数、 倍数と約数	領域A (数と計算)	●
分数と小数、 整数の関係	領域A (数と計算)	●
平均	領域D (データの活用)	●

③ 多	知識・技能の定着の時間
③ 少	課題解決の時間
③ 少	知識・技能の定着の時間
③ 多	課題解決の時間

(例) 3年生 たし算とひき算

小単元・小見出し	時
たし算	4 ●
ひき算	4 ●
たし算とひき算の暗算	1 ●
計算のくふう	2 ●
学んだことを使おう	1 ●
まとめ	1

解き方を分かりやすく説明した後、演習問題を多く解く時間を確保する。
※既習事項として2位数同士の筆算を学習している。
※知識・技能の定着を重点とするため。

実践モデルプログラムの流れを取り入れ、課題解決学習の時間を十分に確保する。演習問題については、個に応じた問題数を解く。
※計算技能を活用して、思考を働かせるため。

単元など内容や時間のまとまりの中で、主体的に学習に取り組めるよう、学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか等を考えることが大切です。

